

ここだよここ！

「あの親父てんで話にならない」の「てんで」は死語ですかね。

「てんで」は「手に手に物を持って」の「手に手に」である。「手に手に」は「各自が・めいめいに勝手をする」の意味となり、「てんでんに」→「てんでに」→「てんで」と変わってきた。「てんで」の段階で「に」がはずれ壊れかかっていたのだから、もう死語になっていてもおかしくない。

「てんで話にならない」とは、こちら話を聞きもせず、自分勝手な捉え方で対応してくる人とまともな話ができない、といった状況の時に使うのである。「てんでに好きなことを始める」いわゆる学級破壊的状况を説明する副詞なのである。

こんな言葉を聞いたことがない人のために情報を提供しよう。この言葉は昭和 30 年代によく使われていた。日活映画が青春路線を突っ走っていて、吉永小百合・和泉雅子・和田浩治・川地民夫・芦川いずみ・沢本忠雄・葉山良二が出演していたころの映画を見ると台詞の中にこの言葉を聞く。という余計わからないだろう。

昔の若者は「てんで」話にならないことがあったのだが、漢字の話をする時は「てんで」話ができるしまうのである。

別項で「主」の第 1 画は「縦棒」ではよくない。「点」でないという意味がわからないと書いたが、ここでは少し違った「点」の話をしようと思う。

「点」の意味するもの、まずひとつ目は「注目点指示」である。

漢人は「上」という抽象概念を表すために、ある境界線の上に点を打つ「」という図形的表現をとった。同じく「下」は「」である。それが今では漢字らしい書き方で「上」「下」である。このように「点」は注目して欲しい個所を指し示すと思われる。それをいくつか例をあげて実証する。

井戸の「井」は図形上それで十分と思うが、理屈が合わないと思う人が居たようだ。

『井』はただ木を組んだだけのものである。つまり「井桁」である。井戸とは水を得る為の施設である。しかし井桁は井戸の構造を維持するための施設に他ならない。水を意識するのなら、井桁のどこにその意義があるのか示さなければならぬだろう。人によれば井桁の外に目

が行って井戸端会議の開催場所とってしまうかもしれないのだ』

世の中いろんな人が居るのだから、そう言われたらごもっともだと言わざるを得ない。

「井」の井戸たる所以は水の存在する『ここだよ、ここ』。厳密に考慮した結果「井」の中央部に点が打たれることになった。つまり「井」となった。実は「井」は「井」の本字である。本字と言うのは現在正しいとされている前の時期に正しいとされていた漢字という意味である。

「井」を見て「どんぶり」乃至は「どん」と読むのは日本人で、作った漢人は「井」を「いど」とした。

「井」は日本では「鉢」の意味に取ったが、これはご存知の通り「井戸に物を投げ込んでドンブリ」なのである。日本ではこの字をもとにさらに二番煎じで作成した国字がある。右の字である。

井

なにやら特定できないものを投げ込んで「どんぶり」と音がするものか。「人」が飛び込んだら「ザンブリ」、葉っぱが落ちたら「ハラリ」か。小石なら「ポッチャン」である。「ドンブリ」という効果音を発生させるためには大「石」だろう。ご丁寧様。

次に「丹」。この字の元の意味は、辰砂（硫化第二水銀）を掘る井戸である。この字の原型は

「丹」である。周りの4本の線は井桁、中心の点は「辰砂の採れる位置」を示す。「丹」の点も『ここだよ、ここ』なのである。

丹生・丹比は水銀の産地であった。辰砂は赤いから「丹」＝「赤い」と意味が転化し、『青丹よし』なんて使われるが。水銀は鍍金や薬品の原料として使用される。不老長寿の薬である。だから「丹」は「仁丹」「萬金丹」など薬品名に使用される。

以上が「ここだよ、ここ」記号であるが、次に略した結果が「点」という文字をお見せする。

「太」は「大」と同義である。

その昔「大大」は「さらに大きい」「最高に大きい」という意味の熟語だった。書記する場合初めの「大」は是非とも書かなければならないが、次の「大」は反復記号でもいい。通常私た

ちは「々」を使うが、もうひとつ印刷用語でいう「ㄣ」（ピリピリ）」を使う手がある。右図の通り、これがいつの間にか「大」の股下に入り込んで「太」になった。「ピリピリ」は別項にも書くが「二（数字の2）」の変形である。参考ま

大 → 太 → 太

で「太」の異字体に「𡗗」がある。

その他の点が付くが「点」の意味はない漢字を挙げよう。

「犬」の点は立っている耳なのだそうで、「犬」自体が犬の全体像の象形であり、「大」とはまったく関係ない。「犬」は「大+点」ではないのである。

「土」は点が肩についているから「土方」、「𡗗」は点が中についているから「土中」、「石」

は点が上だから「石上」、「𡗗」は点が中だから「石原（腹）」。

以上は全部私の嘘である。これらの意味はすべて土・石と変わるところはない。姓名判断で凶を吉にかえるための画数稼ぎ、あるいは姓に独自性を持たせたかった目的から作られたものだ。

「𡗗」は仏教の書籍で使われる「伊」の俗字、「𡗗」は「下」の俗字。いずれも点に意味はない。1画の向きが違うだけで読み間違えないように。仏典以外には出てこないようだから日常生活でこの字を知らなくても問題なし。

「点」ひとつで色々な意味がある。上に述べた以外に別章で述べたように「主」の頭の点は「灯心」である。漢字の構成要素の形ひとつが、ひとつの意味と対応するということはない。

漢字の造字方法には構成について絶対的な条件はない。ある字形を書いた時に多数の人がその意味するところを理解してくれることが肝要なのである。その意味では「漢字」は「感じ」なのであり、ひとつ屋根の下にいるか、同じ釜の飯を食った間柄でないとどうしてもその図形がその意義をとるのかわからない可能性がある。フィーリングで絶対概念を理解すると言う、とても難しいものなのである。

だから要はその字ごとにどういう字形でどういう概念を持っているかを覚えなくてはならないのである。点にはこういう意味があるよと聞いたら、ふところを大きくして点にはそういう意味もあるのだねと憶えておくことが大事であり、くれぐれもその意味付けが他の漢字に応用できる絶対的なものとは思ってはいけない。

また一社会人として漢字を使う社会により参画できると目を光り輝かして喜びに浸る態度でその字形を受け入れるのである。ということはまだ脳みそが元気に成長する時期にどんどん憶えさせる事が必要である。私のように MRI で撮った脳みそ断面写真が雪の結晶のように痩せ

細って見え、かつ自らの生き方に頑固になった者には、新しい漢字はてんで認識し利用できないものである。おわかりかな。

この著作権は岡和男に帰属します。
©Kazuo Oka 2000